

ねじりはちまき

10月 ^{かなづき}神無月 寒露、霜降の月になりました。10月1日は衣替えです。

8日寒露、11日スポーツの日、18日は十三夜です。20日えびす講、23日霜降となっています。コロナのため、あまり外に出られないので月見でもしませんか。秋の澄み渡る夜空の月は、旧暦で9月13日。新暦で10月18日です。

『十三夜』と言います。台風シーズンの9月の十五夜よりも10月の十三夜のほうが晴れる確率が高いことが広く普及していた理由のようです。十五夜の別名は芋名月と呼ばれています。十三夜は豆名月、又は栗名月と呼ばれ、お供物の豆や栗がこの時期に食べ頃になることがその由縁と言われています。

十三夜は十五夜に対して『後の月』とも言われています。寒暖差が多くなりますので体調など崩されませんよう、お気を付け下さい。

幸田 常一

<会社近況>

10月に入りました。夏日のような日があるかと思えば次の日は寒かったりして温度差が大きいですね。お互い体調管理には十分気を付けたいですね。ただいま、郡山市の現場では住宅新築工事を、本宮市の現場では住宅修繕工事をお世話になっております。

<災害備蓄の見直し>

災害の備えをされている方は多いと思いますが、備蓄の見直しはされていますでしょうか。季節や気温が変わると備蓄内容も若干変化が必要です。感染対策グッズや、食品の賞味期限も含め確認が大切です。日頃の生活になじんだ物品や味で、非常時の安心を得られたら備えあれば憂いなしですね。

<商品紹介> フットスイッチユニット

フットスイッチユニットなら水栓金具はそのままスッキリ解消

ハンバーグの仕込み中でも



水栓レバーが汚れないからうれしい。

お肉の脂で指先がギトギトなときや、手に付いた泡を洗い流したいときに大活躍。水栓レバーをさわらなくても水が出せるので、水栓レバーが汚れません。

手が洗剤で泡だらけでも



包丁をサッと流したいときも



作業の手が止まらないからうれしい。

手に持った包丁を軽く洗いたいときや、研ぎ洗いで手がお米だらけのときに便利。手を止めることなく、サッと素早く洗い流せるので調理作業がはかどります。

お米を研ぎながら

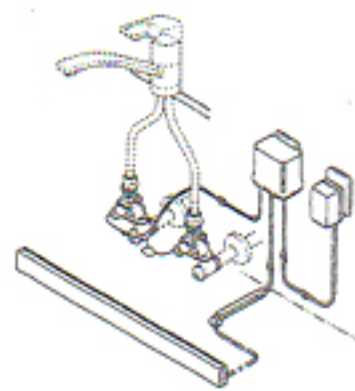
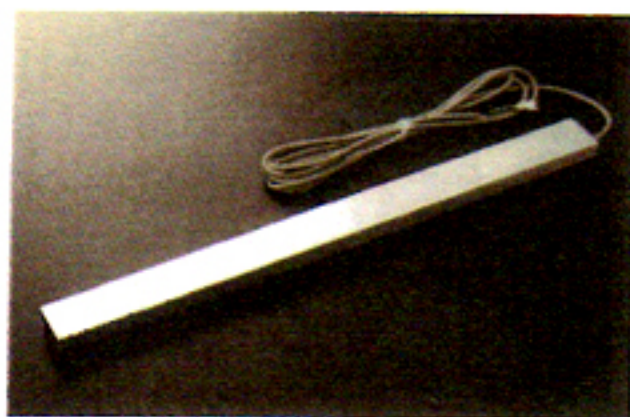


手を使わずに、足のつま先で出し止め 作業スムーズ&エコノミー

水栓のハンドルをお好みの位置にセットして、足元のバー状のスイッチで水の出し止めができる仕組みです。毎回の手元ハンドル操作が不要になり、キッチン作業がスムーズに。こまめな止水で節水効果もアップします。

<TOTO より>

詳しいカタログあります。



フットスイッチユニット
TES35R (AC100Vタイプ)
¥39,800

※取り付け可能品: 台付きタイプのシングル、ミキシング、2ハンドル混合水栓。
※止水栓が同梱されておりませんので、別途ご購入ください。

節水 節湯 (シンブル混合水栓、またはミキシング混合水栓と同時に施工された場合)

令和3年 10月5日発行

有限会社 幸田建設

<発行責任者>幸田久美

〒969-1204

本宮市糠沢字八幡 1-1

電話 0243-44-3816

<後記>

先日、子どもの運動会を親に行って来ました。一生懸命走る姿や、みんなで協力して応援する姿を親で感涙してしまいました。子供たちが眩しくキラキラ輝いて見えた運動会でした。

ほしの

木の話をつつほど

今回は木の話である。ご承知のように福島県の木はケヤキである。昭和41年9月28日に公募により選ばれた。その時の公募の趣旨は「強くたくましく生きようと願う県民の姿を表現するのにふさわしい木を選んで欲しい」ということであった。そうしたら、ケヤキがそれにふさわしいとして選ばれたわけである。それだけ身近に見られる木で、大木となった美しい樹形が人々を元気づけていたと言えよう。なるほどと頷けるものがある。

実を言うと我が家にも、樹齢50年近くのケヤキがあったのだが、どうしてか枯れが進行したので今年に入って業者に伐採してもらった。心が痛む決断であった。幸いにして、屋敷内には既に若木が育っているの、後釜として育てようと思っている。どうしてか、ケヤキの木がないと物足りない感じがするのである。そう思うのは小生だけかも知れないが、不思議だ。最近になって、ふと地域に、それも屋敷内にケヤキがあるお宅がどれほどあるものか、調べてみたくなった。既に通りがかりに見て知っている所もある。そこでカメラを持って出かけた。まずは隣近所から。4軒ほど大木になっているのがある。なぜかこの辺に集中している。それから、足を延ばして屋敷森がある所を見つけてその様子を伺うと、ほぼ間違いなくケヤキがあった。そんなわけで仁井田地区を始め、荒井地区、旧本宮地区の14か所でケヤキの存在を見ることが出来た。樹齢が優に50年を超えるものも何本かあった。小生が眼にしたのはごく一部だと思う。それにしても、何でケヤキを屋敷内に育てたのだろうか。単なる防風林ではなさそうだ。確かにそれもあったろうが、それだけではないと思えてならない。そこで、「ケヤキの特徴と日本人の関係」という項目がインターネットで検索できたので、調べた。それによると、「けや」は「際立って目立つ」「美しい」といった意味の「けやかし」に由来し、ケヤキの名前は「けやけし木」の略と言われるそうだ。そういったことから、屋敷森には不可欠の存在となり、加えて屋敷の護り神的存在として扱われていたのかも知れない。それともう一つ、うがった見方かも知れないが、ある樹齢になれば材としての価値(売れば)も期待されていたのではないだろうか。また、ケヤキは街路樹としても使われている。美しいケヤキの並木は目を奪うものがある。ケヤキの街路樹は各地に見られるが、仙台の青葉通りや東京の表参道が特に有名である。

では、ケヤキは材としてどう扱われているのか。ケヤキは日本の広葉樹の中でも最高クラスの良材として、神社・仏閣の建築材として使われてきたこと、そして一般の住居では建具や床柱に、変わったところでは楽器で和太鼓や琴に、臼や杵にも使われてきた。

それでは、ケヤキの材としての特徴はどういうところにあるのか。三つほどあるが、①力強く美しい木目を持つ、②材質が堅い(それだけ丈夫である)、③水分調整(乾燥)が難しい、などが挙げられる。②と③は加工に当たっての職人泣かせと言われるものである。③については、加工に当たってねじれや反りが起こりやすいので、製材してから何年も寝かせて乾燥させないとなかなか落ち着いてくれないという。②については、こんなことが伝えられている。安土桃山時代に縦引きの鋸が登場し、堅いケヤキも板材として使われるようになったとのこと。それまでは、掘立て柱の円柱として重宝されていたのだ。その歴史は古く、弥生時代中期まで遡る。その頃の遺跡の大型建造物跡の柱穴に柱根が残っており、その柱に直径80センチ、長さ10メートルのケヤキが使用されていたことが確認されている。①については、特に樹齢の高いケヤキの根元近くには、独特の丸い模様が現れることがある。この珍しい模様はとても縁起が良いものとされ、この模様を「勝ち星」に見立てて相撲部屋の看板に使われたとのこと。また木目とは別だが、ケヤキはとても重たい木材なので「一度看板を上げたら下ろさない」という意味を込めて縁起を担ぎ、老舗の店の看板に重宝されたという話も伝えられている。先にケヤキは材として、神社・仏閣に使われたと触れたが、その建築物として有名なのは、京都・清水寺の「清水の舞台」である。この舞台はそれぞれ300年を超すようなケヤキを「懸造り(かけづくり)」という手法で、

釘一本も使用せず組み上げられているのだそうだ。今の舞台は1663年に再建されているが、補修を加えながら400年経つ。ケヤキの耐用年数は800年と言われ、今後さらに補修を加えながら400年持たせることになる。では、この舞台にはどのくらいのケヤキが使われているのか。説明によると、直径80cm、高さ12mのケヤキを168本使用しているとのこと。この話を聞いて、現在の舞台をあと400年持たせ、再々建する時300年を超すケヤキについて必要本数をうまく調達できるのだろうか、余計な心配をしてしまった。大部先のことだが、手当がうまくいきますように祈るばかり。

次に桐の話に移りたいと思う。桐には紫の花が咲くがとてもきれいである。何故桐を取り上げようと思ったかという、その花故ではなく、小生の妻の生家が会津であることにある。会津では、子どもが生まれた時、女の子であれば嫁入りに備え、桐の苗木を植えると聞いていたからだ。桐が成木になるには15~20年。箆箆や長持ちにして持たせたという。どうも江戸時代から始まったようだ。そしてもう一つ。奥会津に三島町があるが、そこでは桐（会津桐と称される）の植栽と箆箆など桐製品づくりに熱心に取り組んでおり、小生が県職員時代の若い時にその振興策に関わったことがあったからだ。

この桐箆箆のことであるが、インターネットで「桐の文化史」にアクセスしたら、以下のようなことが紹介されていた。桐箆箆は江戸時代に普及するのだが、なぜ普及するに至ったかである。江戸は世界有数の大都会に発展してゆくが、そこには諸藩の武家屋敷が立ち並び、町民が暮らす下町には木造の商店や長屋が密集し、ひとたび火事が出れば、あっという間に燃え広がって大火となった。火事が起こると人々は大切なものを持って逃げるしかない。そのため、当時の箆箆は車輪のついた車箆箆が主流であった。そういう状況下、江戸最大の大火で知られる明暦の大火(1657年)が起こった際のこと、通りは車箆箆を持ち出した人々でふさがれ、立ち往生する車箆箆に火がついて被害を拡大させてしまった。これを重くみた幕府は、後に車箆箆の使用を禁止してしまうのだ。そこで、注目されたのが桐箆箆である。桐は軽くて燃えにくいいため、火事が起きても担いで逃げる事が出来るうえ、炎の中でもなかなか燃えない、たとえ火がついても燃え広がらずに表面だけ焦げて、中の着物は無事ということも。水をかければ材に水が染み込んでさらに燃えにくくなるため、「近所で火事が起きたら、濡らした布団を桐箆箆に掛けてから逃げろ」とよく言われたそうだ。こうして桐箆箆は大流行し、庶民の間で急速に普及していった次第である。

また、桐箆箆は火事だけではなく、水害にも強いと言われる。総桐箆箆であれば、軽くて水に浮き、濡れても引き出しが膨張することで気密性が上がり、中に水を通しにくくなる。実際洪水で桐箆箆が流されたものの、引き出しの中には浸水せず、着物が無事だったという話は日本各地に伝わっているということである。

こうしたことを知ってみると、日本は湿気が多く、季節による寒暖差が激しく、雨がよく降るため水害も多く、木造住宅が多くて火事の心配もある。そうした我が国であるが故に桐を家具用材として用いてきたのも頷ける。桐材を用いているのは世界で日本のみである。桐は日本の独自性を表わす文化的意味合いもある点で、今回取り上げた甲斐があったかなと思う。もっと触れたいこともあったが、今回はこれで終わる。

岐阜県・長野県の秀峰 小秀山、奥茶臼山、鉢伏山

当初の予定では、岐阜県と長野県の県境に位置する阿寺（あでら）山地の小秀山と奥三界山、長野県南部の奥茶臼山、長野県中部の鉢伏山と鉢盛山の5つをまとめて登ろうと思ったが、調べていくと奥三界山と鉢盛山は8月の豪雨による林道崩壊などで通行止めになっていた。

全国では新型コロナウイルス感染症対策で緊急事態宣言が発令されている地域があり、福島県もまん延防止等重点措置がとられていたため県外への移動は自粛していたが、いずれも解除の見通しになってきたこと、高い山の場合は間もなく雪が降ってくるので、密かに、こっそりと出かけることにした。

ガイドブック：新版日本三百名山 登山ガイド（上、中、下）
：日本三百名山 山あるきガイド（上、下）

【山の概要】（百は日本百名山、◎は日本二百名山、○は日本三百名山）

- 1 小秀山（◎こひでやま、1982m、岐阜県・長野県境）グレード ★★★
- 2 奥茶臼山（○おくちやうすやま、2474m、長野県）★★★★
- 3 鉢伏山（○はちぶせやま、1929m、長野県）★★（山あるきガイドでは★）
* 奥三界山（○、1811m、岐阜県・長野県境）と 鉢盛山（○、2447m、長野県）は山行を中止。

【日程概要】9月28日（火）から10月2日（金）までの5日間

9月28日（火）移動、小秀山登山口乙女溪谷キャンプ場 車中泊

29日（水）小秀山登山。移動、奥茶臼山登山口しらびそ峠 車中泊

30日（木）奥茶臼山登山。移動、鉢伏山登山口 鉢伏山荘泊

10月1日（金）鉢伏山登山。移動、帰宅

2日（土）予備日

28日（火）移動

自宅を8時過ぎに出発。東北道岩舟 JCT～北関東道高崎 JCT～関越道藤岡 JCT～上信越道更埴 JCT～長野道岡谷 JCT～中央道と乗り継いで15時前、中津川 ICを降りる。

休憩は東北道都賀西方 P A と上信越道の東部湯ノ丸 S A、中央道の駒ヶ根 S A の3箇所。

当たり前のことだが、登山口はほとんどが山奥にあるので、コンビニもGSもない。国道4号線沿いに住む自分の普段の感覚でいると大変なことになる。コンビニで翌日の昼食のパンを買いGSで燃料を補給し、登山口の乙女溪谷キャンプ場に着いたのは16:20。駐車場には車が3台と大学生と思われる若者が5人いた。彼らは、小秀山に二ノ谷コースを登り、三ノ谷コースを下山してきたと

のこと。登山道の様子を聞くと、何箇所か落石や土砂崩れで木道や橋が崩壊しているところがあることなどを教えてくれた。彼らは6時間ちょっとで登下山したらしい。ガイドブックには歩行時間7時間40分と8時間となっている。若者達はおそらく競うようにして歩いたのだろう、自分は休憩も含めると9時間以上かかると思った。

無人の管理棟で登山届けを書き駐車料金500円を所定の封筒に入れ箱に投函する。管理棟横の二ノ谷登山口から10分ほど歩いてみる。樹林帯の中で暗い。急流の溪谷沿いの登山道は木道やハシゴの連続で湿気っていて滑りやすい。夏場でない平日のキャンプ場には人の気はない。

次第に暗くなってきたので、車内助手席側に寝床の準備をし、時間のかからないラーメンとサバ缶、ソーセージ、チーズの夕食とする。今回はアルコールは持ってこなかった。キャンプ場なので携帯電話は通じる。

19時就寝。

朝方寒くて目が覚め、シュラフの上にタオルケットを掛け、まどろみながら身体の覚醒を待つ。

29日（水）小秀山登山

5:45起床。外に出て見上げると樹林に囲まれた空間の青空の真ん中に半月の月が残っていた。台風16号はまだ遠く、雨の心配はなさそうだ。

お湯を沸かし、カップのワンタンとパンとバナナ、缶詰で済まし、モタモタしているうちに7時になってしまいようやく出発した。

ゴーという音としぶきを上げる急流沿いに設置してある木道や栈橋【写真①】は傾斜があり、床には滑り止めが着いているが慎重に進む。小さな滝がいくつもあり特徴のある滝には“ねじれ滝”や“和合の滝”などの名前がついている。景観はすばらしくこのコースをガイドブックで勧める意味を理解する。

途中、落差が100m近い、二筋の滝（夫婦滝：男滝【写真②】、女滝）の手前で橋や階段が壊れているところがあったが、流れから頭を出している石を伝ったり、ストックを駆使してなんとか慎重に通過することができた。男滝の滝壺着が9時。しだいに傾斜が急になり、木の根を頼りに登る。鎧岩（よろしいわ）を回り込むと沢音が小さくなり静かになる。20分間休む。10:10発。カモシカ渡り（看板がある）では、斜度のきつい岩場だが足の置き所はあるので面白い。高さが10m以上あると思ったがガイドブックには7mと書いてある。登り切って少し緩やかになると三ノ谷との分岐となり、その先はさらに勾配が急になり兜岩（かぶといわ）に至る。兜岩からは展望が良く絶好の休憩地と紹介されているがまだ先があるので休まずに進む。第1高原の標識からは勾配は緩やかで湿地帯もある。いくつかのピークを越えて避難小屋のある小秀山山頂1982mに着いたのは12時

半過ぎ、約5時間かかった。

山頂からの展望は360°だが、北側の御嶽山(百、3067m)【写真③】が圧倒的で、他の山々は目に入らない。山頂下部から噴煙を上げている。

30分ほど休み下山する。当初の予定通り二ノ谷と三ノ谷分岐から三ノ谷コースを進む。二ノ谷コースはなんとか登ったが、下りには危険だと思った。三ノ谷のコースは“谷”と名が付いているが、尾根筋の登山道で、眺望もなくただただ長いコースだった。三ノ谷登山口に降りたのは16時を過ぎていた。キャンプ場までの標識の矢印が方向違いで20分ほど時間をロスする。幅広の未舗装の車道を下り、管理棟脇の駐車場に着いたのは17時半。結局10時間を越える山行になってしまった。

翌日予定の奥茶臼岳登山口の「しらびそ峠(1833m)」までは車で3時間くらいかかる。ホントであればどこか宿を見つけて翌日一日を休養日にして身体を休めたいところだが、台風16号が近づいてきているのでとにかくしらびそ峠まで行ってみることにした。コンビニでおにぎりとお味噌汁を食べ、中津川ICから中央道に乗り、飯田ICで降りてナビに従い山道を進む。対向車もないが上り下りのカーブが多くスピードも出せない。ところどころ聞きにくいラジオを聞きながらしらびそ峠に着いたのは21時前だった。

先着の車が1台駐まっいて、目を凝らしてよく見ると中年男性が一人ヘッドランプを点けてパーベキューをしていた。二匹の小型犬と一緒に。

明日奥茶臼山に登るんですかと聞いたら「星を見に来た」とのこと。富士山よりも良い場所だとのこと。確かに峠から見える範囲には人工の明かりはなく東側が開けていて、見晴らしが良く満天の星と赤石山脈(聖岳、赤石岳、塩見岳・・・)の黒々としたスカイラインがくっきりと見えていた。天の河がすごいボリュームで迫ってくる。素晴らしい。

疲れているがなかなか寝付けぬ。夜の山道運転で神経が高ぶっているのだろう。とにかくこのまま明日も好天が続くことを願って目を閉じシュラフに潜ってジッとしていた。

30日(木)奥茶臼山登山

5時過ぎ起床。風もなく晴れ間があり安心する。驚いたのは、彼がシュラフにくるまって外に寝ていたことだ。寒くなかったですかと聞くと今はまだ大丈夫、あとひと月もすると外では寝られないですねとのこと。自分のことはさておいて、世の中には変わった人がいるものと思った。

東側の赤石山脈上空の朝焼けがきれいだった。【写真④】

台風16号の影響が出てこないことを願いながらパンとバナナを食べ6:10出発する。登山口の案内板に奥茶臼山まで8km、4時間30分と書いてある。登山届

けを書こうとしていたら車がやって来て奥茶臼山に登ろうとする人が話しかけてきた。“先に行って待ってます”と声をかけ出発する。

ガイドブックには歩行時間8時間と8時間25分となっている。前日の小秀山より所要時間は長いことになる。出発時間が1時間早いのでなんとかなるだろう、台風16号の接近による雨・風が来ないうちに下山したいと思った。

奥茶臼山まではいくつかのピーク（山）をこえていく。

登山口・しらびそ峠（1833m）～前尾高山（2089m）～尾高山（2213m）～奥尾高山（2266m）～岩本山（2269m）～奥茶臼山（2474m）。

登山口から前尾高山まで樹林の中の急な登りで始まる。右（東）側の樹林越しに赤石山脈の聖岳や赤石岳が見えていて「ビューポイント→」の案内標識があるが先を急ぐ。

しかし調子が出ない、気持ちは急くが身体が適応せずに、重くもないザックを重く感じ、肩が痛くなってきた。足も思うように出ない。身体の動きが各部所でバラバラの感じだ。サアアて困ったと思っていたら登山口で出合った人（Wさん）が追いついてきた。話し好きの人で、自分より3歳若い地元長野県の人。自分が先行したがどうしようもなくブレーキをかけてしまっている。

尾高山まで2時間半かかってしまった。ガイドブックでは1時間30分～1時間40分。Wさんは私が登ってきた300名山の情報を聞いたがっていたがこのような状態ではWさんに迷惑をかけてしまうと思ったので、住所と携帯番号を交換しWさんに先に行って貰うことにした。自分としては、明るいうちに下山できないかもしれないと思い引き返すことも真剣に考えた。持ち物を再点検し、カップの上下、食料、水、蓄電池式の150m照射可能なヘッドランプ、寒さをしのぐ衣類があるのを確認した。

ここはまず自分のペースを取り戻すことが大事と思った。調子が出ない要因としては、前日の疲れが睡眠不足で取れていないこと、山道の夜間長時間の運転で神経が高ぶり睡眠不足になったこと、余裕を持った食事ができなかったこと、生理現象の処理も要因のひとつだろう。加えて調子の良い健脚の人と一緒にになり自分のペースを作れなかったこともあるかもしれない。

岩に腰を下ろし気持ちを落ち着かせ、水分を多めに摂る。次にいつもジムで筋トレの前後にやっているストレッチを一通りやってみた。さらには生理現象のひとつを解消してスッキリする。バナナでエネルギーを補給する。

約50分の大休止の後、引き返すことも頭の隅におきながら、行ける所まで行ってみようと思いソロソロと歩き始めた。やはり登りがきつかったが尾高山以降は割と平坦なところが多かったのでしだいに調子が出てきた。肩の痛みも薄れ身体の各部所が少しずつ一体化する感じがしてきた。

奥茶臼山の登山道そのものは前日の小秀山の二ノ谷コースの溪谷や岩場のよ

うに変化があるわけではなく技術度としては高くないが、ただただ長く、体力度が高い。体調が良ければ難しい山ではない。

奥尾高山を越え岩本山を過ぎていよいよ奥茶臼山最後の踏ん張りどころまで来たら下山してきたWさんと出会う 11:30。ここまで既に 5 時間以上かかっている。Wさんから山頂までの道の様子を聞き励まされる。

山頂の手前に見晴らしの良いところがあり、赤石山脈の聖岳や赤石岳、塩見岳などが近くに見えた。

そんなに急ではない道を登り 12:50 奥茶臼山山頂着【写真⑤】。6 時間 40 分かかった。

山頂は樹林に囲まれて見晴らしは良くないが、木と木の間に槍ヶ岳が見えた。槍はどこからでも同定できる。

パンを食べてゆっくり休憩し 13:30 下山にかかる。右足のアキレス腱が痛み始め、左足の親指の爪先の部分が痛んできたなど思った頃から空が暗くなってきて下からも雲がわき上がってきた。雨粒が降りてきてカップの上を羽織る。台風 16 号の影響がいよいよ長野県南部まで及んできたのだろう。

17 時過ぎ、しらびそ峠登山口着。雨はそんなに強くはならなかったが厚い雲に覆われ薄暗くなってきた。所要時間約 11 時間の山行を無事終える。ガイドブックのタイムを 3 時間オーバーした。

数ある山行の中にはこういうときもある、体調が悪いときの山行の仕方を学習したとも言える。負け惜しみであるが。

翌日は長野県松本市に近い鉢伏山に登る予定で、以前に宿泊所として山頂の直ぐ下の鉢伏山荘に予約しておいた。山荘の主人に到着が遅くなることは前もって伝えてあり、食事なしの素泊りの予約をしていた。さらに到着が遅くなりそうなので、とにかく飯田 IC の近くまで行ってから山荘に電話することにし、山道を下っていく。

コンビニでおにぎりサンドイッチと牛乳を買い甘いものも求める。主人と話したら、客は私一人で起きて待ってると言ってくれた。道順の説明も受け、缶ビールを一本頼んでおく。

飯田 IC から岡谷 JCT～長野道塩尻 IC～崖の湯 (がけのゆ) 温泉経由で高ボッチ高原の先の狭い舗装路を登っていく。標高 1837m の鉢伏山荘には 21 時半に着いた。途中鹿一匹とカモシカ二匹が道路を横切っていた。カモシカは大きかった。

山荘は自家発電設備を持っているが、当夜は電気を使わずに要所に太いろうそくを配置していた。おかげさまで大変雰囲気のある情景となった。山行 3 日目にして初めてビールを飲んだ。肴は主人が出してくれた乾き物。自分より一昨年上で既に古稀を迎えている主人はいつもは 8 時には寝るとのことだが、黒霧島を小さな杯でチビリチビリつきあってくれた。自分はビールを空けてから、厚

かましくも黒霧島をねだって、しかも主人にお湯まで沸かして貰った。ろうそく明かりのテーブルで古稀の老人が二人談笑する姿はなかなかない光景だろう。昭和24年から山荘の営業を始め、主人が3代目で45歳から経営に携わっているとのこと。コロナで大変で政府の協力金でしのいで来たこと……話は尽きないが、だいぶ迷惑をかけてしまい慚愧の至りだが23時にはやめて部屋にこもった。窓を叩く雨と風が強くなっていた。鉢伏山頂だけをめざすのであれば20分もあれば登頂できる山なので、今回は登らなくてもよいと思ったこともあり、疲れとアルコールで朝までぐっすりだった。

1日（金）鉢伏山散策

目覚めて外を見ると雨と風が強くなっていた。季節と天候の良いときに妻と二人で来れば良いと思い登頂にはこだわらないことにした。布団の中でまどろんでいたら携帯に主人から電話があった。

宿泊・食堂棟は暗いから、日帰り客用の喫茶棟ともいべき自然光で明るい小さな別棟に来るようにとのこと。数十メートルの距離を車で行った。コーヒーを出してくれ、サトウのごはんと持参のカレーを湯煎してくれた。

鉢伏山の花の話とか若山牧水の歌碑のこととか由緒ある牛伏寺（ごふくじ）のことなどいろんな話をしてくれた。

話し込んで入るうちに雨・風が弱くなってきた。主人の勧めもありカッパを着て山頂まで行ってみることにした。9:30スタート。

霧で眺望は全くないが幅広の散策道路で山頂には20分で着き、直ぐそばの鉢伏神社にお参りする。標識に従い山頂から少し下った所に若山牧水と妻喜志子の歌碑を見つける。喜志子は塩尻の出身とのこと。

鉢伏の山に 朝日さし まろやかに 降りつみし 雪はよべふりし とふ
大正14年春四月 松本より塩尻へ向ふ車牛（?不鮮明）で 牧水詠

常念の峯にいる（旧字）雲 しばしだに晴れよと 待ちて時たちにけり
昭和38年五月末 欠けの湯にて 喜志子

歩き始めたらもっと歩きたくなり、いったん山荘近くまで戻り前鉢伏山（1836m）まで足を伸ばした。笹原には動物の踏み跡でできたけもの道があちらこちらにある。前2日の山行と違ってほぼ平坦な道のハイキングで、こういう山ばかりだと良いのだがと思う。これでも日本三百名山登頂だ。今回の山行全体の整理運動となった約1時間の山歩きを終える。

今回は鉢伏山荘まで車で来てしまったが、牛伏寺からのコースとか何本か登

山ルートがあるようだ。山荘を起点に美ヶ原（王ヶ頭、百、2034m）までのコースもありいつか歩いてみたい。

今回予定の3山に登り、あとは帰宅するだけと思いゆっくりとコーヒーを飲みながら主人と話していたら、主人が是非牛伏寺（ごふくじ）に行ってみたら良いと、丁寧に地図を書いてくれた。登山道を歩くと6kmの距離が、車道だと20km近くになる。

主人との楽しい会話とサービスに感謝し、妻との再来訪を約し鉢伏山荘を後にする。

牛伏寺（*）【写真⑥】は仁王門はじめ如意輪堂、観音堂、鐘撞堂などがあり、境内敷地は15万坪あるとのこと。国の重要文化財8体などを有する東日本屈指の重要文化財の宝庫らしい。参拝客は自分一人で、明かりのついた観音堂の中に入りお参りした。鐘撞きはコロナ対策で紐がなかった。

子宝のお守りを求める。

雨はほとんど降っていない。お寺の駐車場脇のそば屋でちょっと贅沢な天ぷらそばを注文。そばは100%そばではなかったがおいしくいただいた。（福島のそばの方がおいしいと思う）冬瓜の味噌漬け（?）がおいしかった。

（*）牛伏寺：松本市の南東、鉢伏山の中腹、海拔千メートルの幽谷の地に位置する真言宗の古刹。御本尊は十一面観世音菩薩で聖徳太子の発願により建立された。その後756年に唐の玄宗皇帝が楊貴妃の菩提を弔うため、長野の善光寺に大般若経六百巻を納めようとし、中国から日本に渡り納経の途中、経巻を積んだ赤・黒二頭の牛が当寺の麓で同時に斃れ、その使者達はこの経巻を当寺に納め二頭の牛の霊を祀り帰国した。このことにより寺号を普賢院から牛伏寺へと改めた。古来から厄除祈願の殿堂として、特に一月の「厄除縁日大祭」は長野県下最大の規模を持ち例年十万余の参詣者がおとずれる。（パンフレットより抜粋）

2時過ぎ出発。北塩尻ICから乗り梓川SAで給油とお土産を買い往路と逆コースで帰宅する。途中北関東道に入ったあたりから雨、風が強くなり台風の北上とともに車を走らせた感じになった。19時過ぎ帰宅。走行距離1228kmの山旅を終える。ビールで妻と乾杯する。

日本三百名山残り31山。今回の反省点としてもっと余裕のある日程を組む必要があることを痛感した。予備日の2日は寝床で本を読みながら1日ゴロゴロしていた。

令和3年10月 NO102 アンチ・エイジング 山旅遊人



写真①



写真②



写真③



写真④



写真⑤



写真⑥